
催眠療法士と闘牛

絵爾久万

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

催眠療法士と闘牛

【Nコード】

N4784B

【作者名】

絵爾久万

【あらすじ】

紅い物を見ると興奮してしまう男が、催眠療法士の元へやってきた。療法士は、男に催眠をかけて治療を施すのだが、男の小脳の中に眠っていた祖先の遺伝子が・・・。

ある催眠療法士の元へ男が訪ねて来た。

男は悲壮な面持ちで言った。

「最近僕は赤い色を見て異常に興奮してしまうのです。」

この間は共産党のビルの前で信号待ちをしていたら郵便局の集配車がやって来たんで、飛び出して行って車に体当たりしてしまいました。肋骨三本折りました。まだ治療中なんです。

その前は、ランドセルを背負った女子小学生を追い掛け回し、警察に保護されました。事情を話してなんとか見逃してもらいましたが、日に日にそういう奇異な行動が目立ってくるようで怖いんです。」

療法士は言った。

「人類は長い長い進化の過程で、その種族保存の為の行為に相反する行為に及んでしまった大ばか者が必ずいたはずなのです」

「と言いますと?・・・」

「倒錯した嗜好です」

「倒錯した嗜好?」

「代表的な倒錯嗜好と言えば、例えばペドフィリア、ネクロフィリア等々。ま、そういった類は子孫に直接身体的影響を与える事はまづないであろうが・・・。その他にもアニマルフィリア、禽鳥姦、蟲姦、魚姦等々・・・」

「はあ?キンチョウカン??・・・」

「中でも有名なのはギリシャ神話にも登場するアニマルフィリア、つまり獣姦・・・生命科学的には異種間の交合においては、受精は可能であるが染色体着床までには至らないとされている。それは

モラル上の事。当然例外もある。獣姦で思つくのは白鳥に変じたゼウスとレダの間に産まれたヘレネ。また古代エジプト、ミノス王妃と牛の間に産まれたミノタウロス・・・」

「だから何だっていうんですか？」

「そういった様々な性嗜好は古代から、そして今もなお存在しているという事です」

「ちなみな僕はノーマルですよ」

「あなたの事ではありませんよ。いま私が述べているのは遺伝子工学的見地からの一般論です。例えばあなたの祖先が哺乳類の祖先と言われているツパイであったとき・・・」

「ツパイ？もっと分かり易く説明してもらえませんか？」

「了解。じゃあなたの祖先のツパイを山田さんということにしましょう」

「僕は堀田ですが・・・」

「・・・じゃあ堀田さんでいいでしょう。つまり堀田さんは夫の留守中に柳田さんと交合してしまったんです」

「柳田さんって誰なんですか？」

「たこです」

「たこ？・・・」

「わからないかなあ、例えばですよ」

「例えるにしたって・・・」

「生物は先史時代から、いや、時代という人類の創りあげた定義を取り外したとしても、この地球上に有機的物質が発生したその瞬間

から、やつらはマルチコンプレックス的な交合を重ねてきた。しかしそういった過ちがあったからこそ、多岐に渡るトリメンダスな種族が進化してきたと言え、それはあれですけどもね。

そして長い長い進化の過程でその無法者の遺伝子が何世代も時代を経て、現在のあなたの爬虫類脳と呼ばれる原始脳、つまり小脳、つまり祖先から積み重ねられてきた情報を生まれながらにセットアップされて送り出されてきたOS、つまりはウィンドウズ2000のシステムの中に組み込まれているという事ですよ」

「僕が使っているのはXPですが・・・」

「了解。そして何かのきっかけで、例えばその野生脳を取り巻く知識脳、つまり大脳が損傷を受けたり、例えば過労が重なり、大脳の活動が衰えたときそいつは眼を覚まし活動を始める」

「僕の中に僕以外の何者かが住んでいるということなんですか？」

「つまりそういうこと」

「僕の中には一体誰が住み着いているのですか」

「闘牛よ。あなたの場合は大変わかり易いわ」

「闘牛?? なんだかカッコいいなあ」

「フフフ・・・」

「でも、このままじゃ困ります。先生なんとかしてください」

「オッケイ！お安い御用よ。それが私の仕事ですからね。それでは今から催眠術を施しますからね。小脳を取り巻く大脳を一時的に眠らせて、あなたの小脳の中に息づく闘牛の遺伝子に直接働きかけます」

「なんだか怖いなあ・・・」

「大丈夫・・・リラックスして。何も怖がることはありません」
「お手柔らかにお願いしますよ」

「それではこちらのベッドに仰向けに横たわってください」

男は素直に療法師の指示に従った。

「あ、ちよっと、待ってね」

療法師は隣りの部屋から古ぼけたカセットデッキを持ってくると、セピア色に日焼けしたカセットテープを押し込んだ。

リードのテープを送る軋んだ音と共に波の音が聞こえ、やがて心地よい音楽が途切れ途切れに流れはじめた。

「それではあ・・・深呼吸を3回してください」

療法師は先ほどの口調とは打って変わって、穏やかに囁きかけるような声で言った。

・・・スーハー スーハー スーハー

その声は男の鼓膜を伝わり脳髄を心地よく刺激した。次第に男は夢見心地になっていった。

「もう一度」

・・・スーハー スーハー スーハー

「もう一度」

・・・スーハー スーハー スーハー

「今度は右腕が重たくなってきます」

・
・
・
・

「だんだ～ん重たくなってきます」

・
・
・
・

「今度は左腕が重たくなってきます」

「だんだ～ん重たくなってきます」

・
・
・
・

「今度は右足が重たくなってきます」

「だんだ～ん重たくなってきます」

・
・
・
・

「今度は左足が重たくなってきます」

「だんだ～ん重たくなってきます」

「う、ううう・・・」

・
・
・
・

「今度は全身が重たくなってきます」

・
・
・
・

「だんだ～ん重たくなってきます」

「重たくなってきました」

「・・・そ、そんなに重くはないようですが」

男は小さな声で遠慮気に言った。療法士は男の言葉に被せるように声の調子を強めて言った。

・
・
・
・

「ほ～ら、重たくなってきた」

「ほ～ら、ほ～ら、ほ～ら・・・重たくなってきた。」

もう身体を動かそうとしても動きませんよう。
まるで身体の上に大きな象さんが乗っているみたい」

ガッチャン！！

カセットテープのA面が終わった。

療法士はカセットを取り出し、テープを裏返しにし再度セットした。

・・・はあ はあ はあ

耳元で荒い息遣いを感じた。

振り返ると男の顔が至近距離に迫っていた。

「なんだか身体中にもものすごいパワーがみなぎってきたような気がするよ、先生」

「だ、だめよ！まだ立ち上がっては。あなたの上には大きな象さん・
・いえ、あっ、もしやあなたは象さんではなく・・すでに闘牛
？」

「Yes！！ Exactly you know・・・私はマド
リード・ラス・ヴェンタス闘牛場で一番の荒くれ者と言われた伝説
の闘牛テオドル。この男の小脳の中で五百余年間眠り続けてきた。
今まさに己の意のままに動ける自由を得た。ありがとよ！お嬢さん」
「おお、テオドル・・・おお、あなたは本当に闘牛テオドルなの

ね？素晴らしいわ」

「ああ、五百年ぶりだ！とりあえずやらせ・・・ぐっ、ぐわっ・・・先生！テオドルだかなんだか知らないけど・・・なんだかぼく。なんだかぼく。ぼくは堀田です。やらせろよ！あ、ち、違う今のぼくじゃありません。先生えゝなんだかぼく・・・ぐ、ぐぐぐぐ」

キ、キツキキイ・・・ガツチャン！！

きしんださざ波のメロディーが突然止まった。

療法士はカセットデッキのPLAYボタンを何度も押し、再生を試みたがテープは空回りするのみだった。

「この、オンボロカセット奴！！」

苛立った療法士はカセットデッキを蹴飛ばした。倒れた瞬間にFMラヂオのスイッチがONになった。

歌劇カルメン第一組曲『闘牛士』が過激に流れた。

「あ、先生！なんだかぼく。ぐっ、ぐわっ、やらせろよ！！！！

がっふん！！あ、今のはぼくじゃない・・・あ、だけど、ぐるるる」

今となってはどっちがどちだかわからない。闘牛テオドルと男は一体化し、頭に太い立派な角を立て勇猛な雄牛と化し、療法士めがけて突進した。

「あ、やめて・・・テオドル！キャーッ！！」

「ぐはぐはぐは・・・」

「こんな筈じゃ・・・」

ついに闘牛テオドル堀田は療法士を押し倒した。

「オー！ノー！・・・テオドル！オーノー！オーノー！オーノー！！！！」

・・・30 minutes later

「先生・・・ぼく、なんだかやっぱり今のままでいいような気がしてきた」

男は女の目を見つめて言った。

「とりあえずテオドルは引っ込んだよね。うふん・・・さすが闘牛。とってもステキだったわ・・・」

女は頬を上気させて言った。

「先生もその眼鏡と白衣の姿とは打って変わってずいぶん激しく・・・」

そう言って男は女を強く抱きしめた。

「フフフ・・・いやね」

女は男の頬に口付けをした。

「先生の脳の中には一体どんな遺伝子が眠っているんだろうね？」

「フフフ・・・なんだと思う？」

「うーん、牝牛かなあ・・・」

「はずれ」

「はずれ？じゃあいったい・・・」

「カ・マ・キ・リ」

「カマキリ？」

「そう、交尾を済ませたメスのカマキリは、産卵のために・・・」
「・・・?」

「ごめんなさいね」

「うっ、うわあーっ!!!!!!!!!!」

バリバリバリッ!! ベリベリッ・・・グシャグシャグシャ・・・

診察室の中に異様な音が響きわたった。

…完…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4784b/>

催眠療法士と闘牛

2011年4月4日23時33分発行